

079 三度目のガリラヤ伝道(1)

マタイによる福音書 9：35～38、10：1～15、マルコによる福音書 3：13～19、6：7～13、ルカによる福音書 6：12～16、9：1～6

群衆に同情する（マタイによる福音書 9：35～38）

35 イエスは町や村を残らず回って、会堂で①教え、御国の福音を②宣べ伝え、ありとあらゆる③病気や患い（→霊的病を象徴）をいやされた。36 また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。

→回復訳：イエスは群衆を見て、彼らを深くあわれまれた。なぜなら、彼らは牧者のいない羊のように、困惑し（→冷酷な牧者に皮をはがされて、痛みを苦しんでいる）、捨てられていたからである。

37 そこで、弟子たちに言われた。

「収穫は多いが、働き手が少ない。38 だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主（＝父なる神）に願いなさい。」

→（新改訳）天の王は民を羊と考えただけでなく、収穫と考えられました。羊には牧されることが必要であり、収穫には刈り取りが必要です。イスラエルの国民の指導者たちが天の王を拒絶したとはいえ、その民の間には、刈り取りを必要とする多くの人がいました。

【参考】憐れむ、深くあわれむ 等

スプランクニゾマイ（ギリシア語）＝はらわた（スプランクノン、スプランクナ）が痛くなる、突き動かされる、引き絞られる。

タイトル(書名)		章:節 聖句	〔検索対象総数：11 / 聖句等の総数 33250 〕	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳)
S	マタイによる福音書	9:27	イエスがそこからお出かけになると、二人の盲人が叫んで、「ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と言いながらついて来た。	
S	マタイによる福音書	9:36	また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。	
S	マタイによる福音書	14:14	イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て深く憐れみ、その中の病人をいやされた。	
S	マタイによる福音書	15:22	すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。	
S	マタイによる福音書	15:32	イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。「群衆がかわいそうだ。もう三日もわたしと一緒にいるのに、食べ物がない。空腹のままで解散させたくはない。途中で疲れきってしまうかもしれない。」	
S	マタイによる福音書	17:15	言った。「主よ、息子を憐れんでください。てんかんでひどく苦しんでいます。度々火の中や水の中に倒れるのです。」	
S	マタイによる福音書	18:27	その家来の主君は憐れに思って、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。	
S	マタイによる福音書	18:33	わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。』	
S	マタイによる福音書	20:30	そのとき、二人の盲人が道端に座っていたが、イエスがお通りと聞いて、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と叫んだ。	
S	マタイによる福音書	20:31	群衆は叱りつけて黙らせようとしたが、二人はますます、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と叫んだ。	
S	マタイによる福音書	20:34	イエスが深く憐れんで、その目に触れられると、盲人たちはすぐ見えるようになり、イエスに従った。	

	タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数 : 6 / 聖句等の総数 33250]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳)
S	マルコによる福音書	1:41 イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、	
S	マルコによる福音書	6:34 イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。	
S	マルコによる福音書	8:2 「群衆がかわいそうだ。もう三日もわたしと一緒にいるのに、食べ物がない。	
S	マルコによる福音書	9:22 霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました。おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください。」	
S	マルコによる福音書	10:47 ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と言い始めた。	
S	マルコによる福音書	10:48 多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。	

	タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数 : 8 / 聖句等の総数 33250]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳)
S	ルカによる福音書	7:13 主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。	
S	ルカによる福音書	10:33 ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに來ると、その人を見て憐れに思い、	
S	ルカによる福音書	15:20 そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。	
S	ルカによる福音書	16:24 そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』	
S	ルカによる福音書	17:13 声を張り上げて、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と言った。	
S	ルカによる福音書	18:13 ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』	
S	ルカによる福音書	18:38 彼は、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫んだ。	
S	ルカによる福音書	18:39 先に行く人々が叱りつけて黙らせようとしたが、ますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。	

	タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数 : 2 / 聖句等の総数 33250]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳)
S	フィリピの信徒への手紙	2:27 実際、彼はひん死の重病にかかりましたが、神は彼を憐れんでくださいました。彼だけでなく、わたしをも憐れんで、悲しみを重ねずに済むようにしてくださいました。	
S	テモテへの手紙Ⅱ	1:16 どうか、主がオネシフォロの家族を憐れんでくださいますように。彼は、わたしをしばしば励まし、わたしが囚人の身であることを恥とも思わず、	

十二人を選ぶ（マタイによる福音書 10：1～4、マルコによる福音書 3：13～19、ルカによる福音書 6：12～16）

01 イエスは十二人の弟子を呼び寄せ、汚れた霊に対する権能をお授けになった。汚れた霊を追い出し、あらゆる病気や患いをいやすためであった。

→弟子：師に学び、従う者。

02 十二使徒の名は次のとおりである。まず①ペトロ（＝ケファ：アラム語＝岩）と呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、②ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、03③フィリポとバルトロマイ（＝ナタナエル）、④トマスと徴税人（→ローマ帝国は税金を徴収するために地元の人々を雇った。ユダヤ人の徴税人は同胞に嫌悪され、自らの国や宗教を裏切る者と見なされた）のマタイ、⑤アルファイの子ヤコブとタダイ、04⑥熱心党（→カナナイオス：ギリシア語、ローマに抵抗して戦ったユダヤ人グループ）のシモン、それにイエスを裏切ったイスカリオテ（→ユダヤのケリオテ地方、裏切り者）のユダである。

→使徒：師の行動や言葉を他者に伝えるために派遣された者（代理人）。イエスの弟子たちは、使徒と呼ばれた。イエスは弟子たちに人々を癒し、悪霊を追い出す力（権威）を与えた。

十二人を派遣する（マタイによる福音書 10：5～15、マルコによる福音書 6：7～13、ルカによる福音書 9：1～1）

05 イエスはこの十二人を派遣するにあたり、次のように命じられた。

「異邦人の道に行ってはならない。また、サマリア人の町に入ってはならない。

06 むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい。

07 行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。

08 病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。

09 帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。

10 旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない（神が必要なものを備えてくださる）。働く者が食べ物を受けるのは当然である。

11 町や村に入ったら、そこで、（あなたたちを迎えてくれる）ふさわしい人はだれかをよく調べ、旅立つときまで、その人のもとにとどまりなさい。

12 その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。

13 家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる。

14 あなたがたを迎え入れもせず、あなたがたの言葉に耳を傾けようもしない者がいたら、その家や町を出て行くとき、足の埃を払い落としなさい。

15 はっきり言うておく。裁きの日には、この町よりもソドムやゴモラの地の方が軽い罰で済む。」



【参考】熱心党

ユダヤ戦争（帝政ローマ期の AD66 年から 73 年まで、ローマ帝国とローマのユダヤ属州に住むユダヤ人との間で行われた戦争で、ユダヤ属州総督のローマ人フロルスがエルサレムの第二神殿の宝物（17 タラント＝17×6000 ドラクメ〈1 ドラクメ＝1 日の日当〉/タラント＝1 億円－の金）を奪ったことに端を発している）の時、反ローマの暴動の中核をなしたのは、熱心党 (Zealotry) と呼ばれる人たちであった。ヘブライ語で「カーナイーム」、ギリシア語で「ゼーロタイ」（熱心な人々）という。

ローマはユダヤを直接支配下に置き、徴税組織を整備するためとユダヤ人の財産を査定する目的で AD6 年（ルカによる福音書 2：2：キリニウスは AD6 年、シリアの総督になった）に住民登録（人口調査）を実施した（同 2：1）。これに対し、唯一の神のみを支配者とするユダヤ人が、ローマ皇帝に納税することは決して許されないと武力で反乱を起こしたのが熱心党であった。

熱心党は、教養というより、律法を守ることを優先し、それが侵された場合は武力で抵抗する考えを持つ教派であった。彼らは神より与えられた救済を考えていたが、この救済をもたらすためには神は人間の協力を頼りにしていると確信していた。勝利するためには暴力の使用を認め、戦いで命を失うことは神の名における聖者になるための殉教だとした。

熱心党運動のイデオロギー（思想傾向、社会等に対する考え方）は、ファリサイ派の中から生じた過激な行動理論であった。熱心党は、ユダ※₂を中心としたガリラヤ派と、ザドクを中心としたエルサレム派の二派があった。

特に熱心党の中で最も過激な暗殺者集団は、「ガリラヤの短剣党（シカリー派 Sicarii）」（四千人の暗殺者：使徒言行録 21：38）と呼ばれ、常に懐に短刀（シカ：ラテン語）を忍ばせ、反対派を暗殺した。

また、激烈な内部抗争もあり、各派閥間の関係も複雑であった。後、民衆の支持を受けた熱心党のゲリラ活動が激化、社会の秩序と治安は失われ、ユダヤは無政府状態に陥った。

熱心党の人々が暴力を正当化した根拠は、民数記 25：10～11 にあるとしている（歴史によればあまりに過激すぎるのでエルサレムを追放され、略奪や集団虐殺を繰り返して辺境地帯をさまよひ、AD73 年の春、マサダの戦いで殲滅したとされている）。「ユダヤ戦記」および「ユダヤ古代史」の中で、著者フラウィウス・ヨセフスは、熱心党は過激すぎて、古代イスラエル王国を消滅させた元凶であると記している。

→民数記 25：10～11

主はモーセに仰せになった。「祭司アロンの孫で、エルアザルの子であるピネハスは、わたしがイスラエルの人々に抱く熱情と同じ熱情によって彼らに対するわたしの怒りを去らせた。それでわたしは、わたしの熱情をもってイスラエルの人々を絶ち滅ぼすことはしなかった。」

※2：その後、住民登録の時、ガリラヤのユダが立ち上がり、民衆を率いて反乱を起こした（AD6）が、彼も滅び、つき従った者も皆、ちりぢりにさせられた（使徒言行録 5：37）。